

第3期

川崎市ごみ減量推進市民会議

＜平成 23～25 年度＞

活動報告書

家庭で3Rに取り組んで、
集積所をきれいに使いましょう①

川崎市では、平成25年9月から全市でプラスチック製容器包装の分別収集が始まりました。あわせて、普通ごみの収集が週に2回となりました。家庭での分別方法やごみ出し方法について、以下のヒントをご覧ください、市内の3Rを推進しましょう。

Q. 1 3Rってなに？

3Rとは、
①「リデュース(発生・排出抑制)」
②「リユース(再利用)」
③「リサイクル(再生利用)」
を合わせた総称です。川崎市では、地球環境にやさしい資源循環型のまちを目指し、ごみの減量化・資源化のために3Rを促進しています。



Q. 2 家庭で分別するものが多いって大変。どうしたら減らせる？

ごみになるものを家に持ち込まないことが大切です。買い物に出かける時にマイバッグに食品トレイを入れていけば、家庭での分別も楽になり、不要なレジ袋が増えません。

Q. 3 家庭での分別や保管が大変。どうしたらいいの？

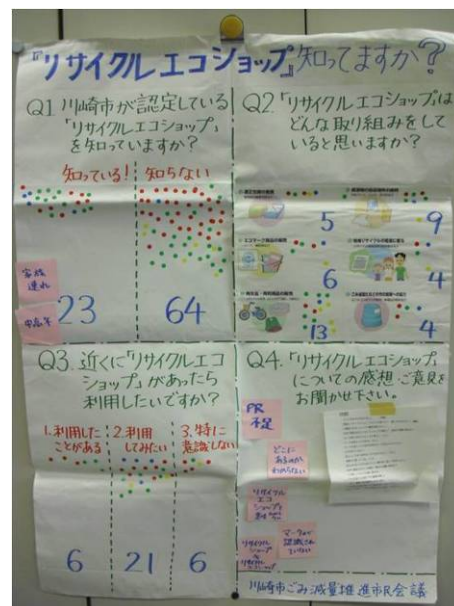
品目ごとの分別袋を用意し、不要になった時点ですぐにミックスペーパーやプラスチック製容器包装に分けることがポイントです。



第3期 川崎市ごみ減量推進市民会議



川崎市環境局・ごみ減量推進市民会議



平成25年12月

川崎市ごみ減量推進市民会議

目 次

1. はじめに	1
2. 川崎市ごみ減量推進市民会議について	2
3. 分科会活動報告	5
(1) Aグループ：廃棄物の3Rと普及啓発	5
(2) Bグループ：生ごみリサイクル	8
(3) Cグループ：リサイクルエコショップの充実	11
4. 市民会議活動報告会・意見交換会	13
5. まとめ	16
(1) 今後の取組に向けて（課題・提案）	16
(2) 第4期市民会議に向けて	17



第3期市民会議の様子

1. はじめに

今年の流行語大賞に「おもてなし」が選ばれました。日本語の美しさと心遣いを込めた美しい言葉ですが、同様に美しい言葉で国際語になったものに「もったいない」があります。今、私たちは、物にあふれた豊かな生活をしていますが、大量生産・大量消費による廃棄物（ごみ）があふれています。とくに人口が集中している都市部においては、廃棄物処理が大きな問題となっています。これは豊かな生活に慣れ、「もったいない」精神を忘れた結果ではないでしょうか。また、私たちが地球環境や生態系に対してできる「おもてなし」は、資源の有効利用であり、廃棄物を出さないことではないでしょうか。

地球温暖化、資源の枯渇などの地球環境への保全への対応のひとつとして、平成 13 年、循環型社会形成推進基本法が施行され、3 R（リデュース〔発生抑制〕・リユース〔再使用〕・リサイクル〔再生利用〕）を基本とした循環系社会への転換が求められるようになりました。川崎市においても、平成 17 年に「地球環境にやさしい持続可能な循環型のまちを目指して」を基本理念に「川崎市一般廃棄物処理基本計画」が策定されました。この基本計画に基づき、「川崎市ごみ減量推進市民会議」が設置され、市民の力で 3R が推進されています。

川崎市ごみ減量推進市民会議は、第 1 期（平成 18～19 年度）では、「地域におけるごみ減量活動」など 3 テーマ、第 2 期（平成 20～22 年度）では、「生ごみダイエット」など 4 テーマで活動してきました。それを受けて第 3 期（平成 23～25 年度）では 17 名の委員によって、A グループ「廃棄物の 3 R と普及啓発」、B グループ「生ごみリサイクル」、C グループ「リサイクルエコショップの充実」の 3 テーマについて検討しました。熱心な検討が行われ、成果としては、A グループでは 3 R を啓発するためのビラが作成され、B グループでは生ごみ堆肥化のためのパンフレットを改訂し、農業者へ利用の呼びかけも行いました。また C グループでは、市民・事業者・市による三者懇談会が開催され、市民の視点でエコショップ・リサイクルショップの認定を検討することが提案されました。

第 3 期の市民会議は 14 回開催されましたが、テーマ設定等に時間がかかり実質論議が短期間になったこと、市民会議活動報告会の参加者が少なく、多くの市民の考えを聞けなかったことなど、反省点も多々あります。これらは、第 4 期の市民会議では改善されることと思います。

私たちが、これからも豊かな生活を営むためには、資源を大切に、廃棄物を出さないことが大切です。その基本は「もったいない」精神ですが、「もったいない」は不要な物をため込むのではなく、不要な物を生み出さないことです。ややもすれば、安価なものを多量に購入し、不用になったら廃棄（処分を行政に委ねる）するということになりやすい私たちの生活のあり方を、家庭内だけでなく、流通や行政のあり方も含めて検討することが大切です。このためには市民会議のような活動は大きな役割を持ちます。これからも市民が自ら考え行動する市民会議の活動が発展することを期待し、この報告書が、その一段階になればと願っております。

末筆となりましたが、精力的に分科会をまとめていただいたリーダーの方々や事務局の方々に感謝申し上げます。

平成 25 年 12 月
川崎市ごみ減量推進市民会議
座長 藤原俊六郎

2. 川崎市ごみ減量推進市民会議について

■ 川崎市ごみ減量推進市民会議の位置づけ

平成 17 年 4 月、川崎市は川崎市一般廃棄物処理基本計画「かわさきチャレンジ・3 R」を策定し、市民・事業者・行政が加わり、協働で地球環境にやさしい持続可能な循環型のまちを目指すこととなりました。

この計画を推進するにあたって、市民の参加と協働を進める場として、「川崎市ごみ減量推進市民会議」（以下、「市民会議」という。）の設置が掲げられています。

【市民会議の設置目的】

市民会議は、市民・事業者・行政のパートナーシップに基づいたごみの減量活動を推進するため、三者による連携の取組みや、市民一人ひとりが地域や家庭で自主的・日常的にごみ減量に取り組むための仕組みづくりを検討します。

■ 市民会議 メンバー

第 3 期市民会議のメンバーは、以下の通り、廃棄物減量指導員（7 名）、ごみ・リサイクル等に関する市民団体（4 名）、事業者（1 名）、学識経験者（2 名）、公募市民（3 名）の計 17 名で構成されています。委員の任期は平成 24 年 1 月～平成 25 年 12 月です。

	氏名	所属	分科会
1	天野 悦子◎	廃棄物減量指導員（麻生区）	B
2	奥山 玲子○	新あさお生きごみ隊	B
3	岸 隆	廃棄物減量指導員（多摩区）	C
4	小金澤 五郎	廃棄物減量指導員（高津区）	A
5	齊藤 幸子	（社）日本フランチャイズチェーン協会	B
6	澤村 繁男	廃棄物減量指導員（宮前区）	A
7	☆繁宮 仁◎	市民公募	A
8	高瀬 美香	市民公募	B
9	☆徳野 千鶴子○	かわさき地球温暖化対策推進協議会（グリーンコンシューマーグループ）	A
10	中本 純子○	生活協同組合ユニーコ	C
11	百武 ひろ子◎	（有）プロセスデザイン研究所 代表	C
12	★藤原 俊六郎	明治大学農学部特任教授	B
13	星谷 芝宏	廃棄物減量指導員（川崎区）	A
14	本間 孝之	廃棄物減量指導員（幸区）	A
15	松井 よし子	川崎市消費者の会 会長	C
16	松下 聡	市民公募	A
17	山田 晃	廃棄物減量指導員（中原区）	A

※「★」は座長、「☆」は副座長、「◎」はグループリーダー、「○」はサブリーダーを示す。

■ 市民会議の活動経過は

市民会議は以下のスケジュールで開催しました。

回	開催日時	会場	会議の概要
第1回	平成24年2月17日 10時00分～12時00分	高津市民館第6会議室	委嘱・会議の趣旨等の説明・正副座長選出
第2回	平成24年3月27日 10時00分～12時00分	高津市民館第6会議室	活動テーマの設定
第3回	平成24年5月11日 10時00分～12時00分	高津区役所第3会議室	活動テーマの設定
第4回	平成24年7月2日 10時00分～12時00分	高津市民館第5会議室	活動テーマの設定 課題の設定・検討
第5回	平成24年8月30日 14時00分～16時00分	高津市民館第5会議室	課題の設定・検討 検討結果の実践 実践結果の検証
第6回	平成24年10月12日 10時00分～12時00分	高津区役所第1会議室	
第7回	平成24年12月21日 10時00分～12時00分	中原区役所 502 会議室	
第8回	平成25年1月31日 14時00分～16時00分	川崎市総合福祉センター 第3会議室	
第9回	平成25年3月26日 14時00分～16時00分	高津市民館第5会議室	
第10回	平成25年5月15日 10時00分～12時00分	高津区役所第1会議室	会議の振り返りの検討 活動報告会の準備
第11回	平成25年7月1日 14時30分～16時30分	高津市民館第5会議室	
第12回	平成25年9月3日 14時30分～16時30分	川崎市総合福祉センター 第3会議室	活動報告会 活動報告書の取りまとめ
第13回	平成25年10月30日 13時30分～16時45分	川崎市産業振興会館 第3研修室	
第14回	平成25年12月4日 10時00分～12時00分	川崎市産業振興会館 第3研修室	活動報告書の取りまとめ

■ 分科会のテーマ設定

第3期市民会議では、第1期、第2期の活動テーマを踏まえ、3つのテーマの分科会に分かれて活動に取り組みました。

3つの分科会は以下の通りです。

分科会	活動テーマ	活動概要
Aグループ	廃棄物の3Rと普及啓発	3Rの推進、集積所美化に係る普及啓発の検討
Bグループ	生ごみリサイクル	生ごみ堆肥流通方策の検討、チャレンジ生ごみダイエット（普及啓発用冊子）の改訂
Cグループ	リサイクルエコショップの充実	消費生活展での市民アンケート、認定店へのアンケート、リサイクルエコショップ三者懇談会の実施

なお、過去2期分の分科会活動内容は下記の通りです。

＜第1期市民会議＞（平成18年度、19年度）

分科会	活動テーマ	活動概要
分科会1	生ごみ減量とリサイクル	手軽に見て実行してもらえそうな内容のハンドブック「チャレンジ生ごみダイエット」を作成
分科会2	地域におけるごみ減量活動	地域の先進的な活動のノウハウを集めて「ごみニティの底力・発表会」を開催
分科会3	事業との連携によるごみ減量活動	スーパー等と連携し、レジ袋削減、マイバッグ運動を展開し、事業者、市民団体、川崎市を含む4者でレジ袋削減に関する協定を締結

＜第2期市民会議＞（平成20年度～22年度）

分科会	活動テーマ	活動概要
第1分科会	生ごみダイエット	他都市の取組事例を調査しながら、家庭で実施しやすい生ごみの削減方法を紹介
第2分科会	普及広報チラシの研究	分別処理の現状・問題点などについて話し合い、町内会等で貼付されている普及広報チラシの良いものを調査し、紹介
第3分科会	レジ袋削減に向けた取組	レジ袋削減に関するアンケート調査や市民団体・事業者・行政の三者による意見交換会を開催
第4分科会	若者へ伝える3R	生活環境事業所や大学生へのアンケート調査を行い、若い世代にごみ削減や3Rを伝える方法を検討

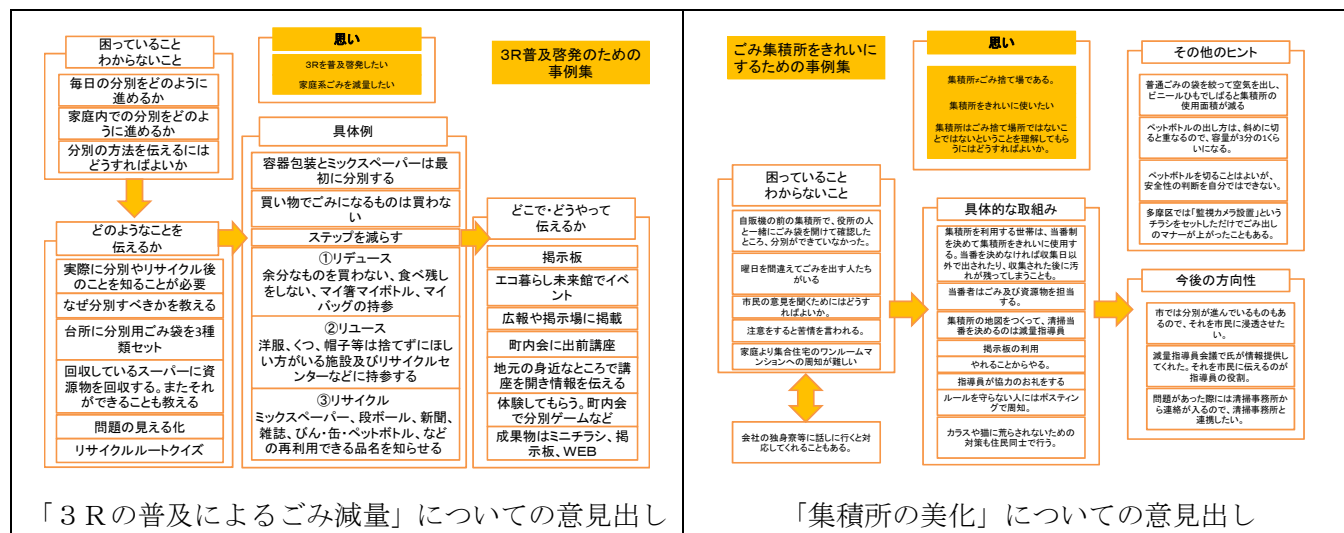
3. 分科会活動報告

(1)Aグループ:廃棄物の3Rと普及啓発

■ 課題設定の背景

Aグループでは、グループ内に多くの廃棄物減量指導員や元廃棄物減量指導員がいたため、グループの取組を考える際に、廃棄物減量指導員の経験を市民の皆さんに還元できることを特に意識しました。当初は廃棄物減量指導員の取組事例集を作成することも考えましたが、普及啓発の対象を廃棄物減量指導員のみとするのではなく、ごみを出す全市民としたいという思いが強く、また平成25年9月より始まった全市でのプラスチック製容器包装の分別回収を好機ととらえ、広く訴求できるものを考えました。

結果的に、グループ内の大きな課題意識は、「集積所の美化」と「3Rの普及啓発によるごみの減量」だったことから、「家庭で3Rに取り組んで、集積所をきれいに使う」ことを普及する広報ツールとして、チラシを作成することにしました。



「3Rの普及によるごみ減量」についての意見出し

「集積所の美化」についての意見出し

■ グループでの取り組みと手法

Aグループの特徴は、何といてもメンバーの多くが廃棄物減量指導員の経験を持っていたことです。そこで、そこで、それぞれの廃棄物減量指導員経験者がどのような取り組みを実践してきたのかを共有し、また、どのような課題に困っているのかを共有することを最初のミッションとしました。

ごみの集積所をきれいに使うために、近隣の人たちと話し合いにより清掃当番を決めたメンバー

や、実際にどのような取り組みを家庭で行えばごみの容積を減らし集積所の美化に貢献できるかを普及しているメンバーなど、様々なメンバーがいました。

そのため、活動はメンバーから「家庭で3Rに取り組んで、集積所をきれいに使う」ために必要なことを議論により掘り起こし、まとめる作業を行いました。

■ 結果

グループの意見や思いをまとめたチラシを作成しました。

家庭で3Rに取り組んで、 集積所をきれいに使いましょう①

川崎市では、平成25年9月から全市でプラスチック製容器包装の分別収集が始まりました。あわせて、普通ごみの収集が週に2回となりました。家庭での分別方法やごみ出し方法について、以下のヒントをご覧ください、市内の3Rを推進しましょう。

Q. 1 3Rってなに？

3Rとは、

- ①「リデュース(発生・排出抑制)」
- ②「リユース(再使用)」
- ③「リサイクル(再生利用)」

をあわせた総称です。川崎市では、地球環境にやさしい資源循環型のまちを目指し、ごみの減量化・資源化のために3Rを促進しています。



Q. 2 家庭で分別するものが増えて大変。どうしたら減らせる？

ごみになるものを家に持ち込まないことが大切です。買い物に出かける時にマイバッグに食品トレイを入れていけば、家庭での分別も楽になり、不要なレジ袋が増えません。

Q. 3 家庭での分別や保管が大変。どうしたらいいの？

品目ごとの分別袋を用意し、不要になった時点ですぐにミックスペーパーやプラスチック製容器包装に分けることがポイントです。



第3期 川崎市ごみ減量推進市民会議

家庭で3Rに取り組んで、 集積所をきれいに使いましょう②

Q. 4 そもそも何で分別する 必要があるの？

品目ごとに再生できるものが違うからです。例えば、同じ紙類でも、新聞紙は新聞紙、段ボールは段ボール、ミックスペーパーはトイレットペーパーにリサイクルされます。プラスチック製容器包装は、マンホールの蓋やアンモニアなどに再生されます。

Q. 6 その他に家庭からごみ を減らすコツはありますか？

マイボトルを持って出かけたり、不要になった衣類等をリサイクルショップに持ち込んだりして、暮らしのいろいろな場面で3Rに取り組むことができます。また、生ごみの水切りもごみの減量に効果的です。

Q. 5 家庭で分別したごみや 資源を集積所に出す時に気をつ けるポイントは？

集積所をきれいに使うためには、各家庭で分別に取り組み、品目ごとに決められた曜日・時間にごみ・資源を出すようにすることが大切です。例えば、ペットボトルを半分に切り重ねたり、ごみ袋から空気を抜いてしばることでごみ・資源の容積を小さくし、集積所をきれいに使うことができます。



第3期 川崎市ごみ減量推進市民会議

(2)Bグループ:生ごみリサイクル

■ 課題設定の背景

Bグループでは生ごみの堆肥化とその流通について検討を進めてきましたが、そこに至ったのは様々な要因があります。まず、冊子「チャレンジ生



ごみダイエット」を創刊し各手法を紹介した第1期と、各手法の検証と推奨を行った第2期を継続発展

させながら、生ごみリサイクルを普及させたい、という思いがありました。市主催の生ごみリサイクル講習会も平成22年2月からダンボールコンポスト講座になりましたが、冊子「チャレンジ生ごみダイエット」と紹介内容が異なっており、発刊から4年が経過しているので「新たな情報を加え、3Rの優先順位を踏まえて改訂したい」と考えました。

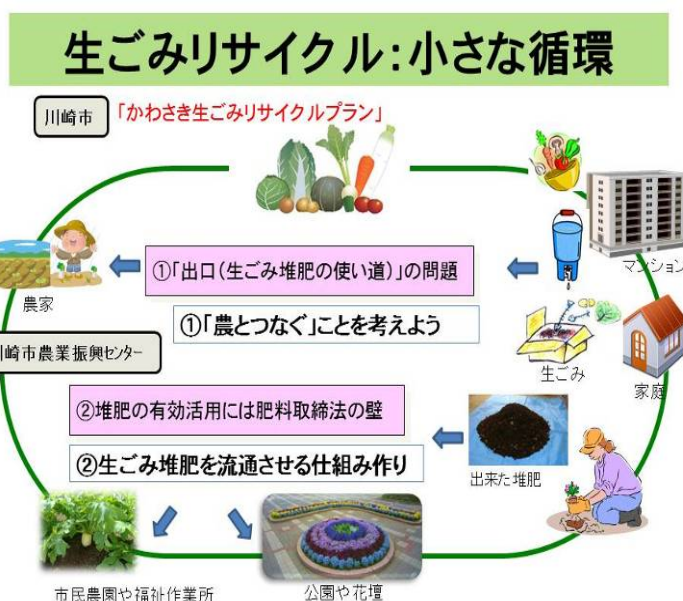


また、生ごみの堆肥化に取り組む家庭が増えても、庭がなければすべてを活用することはできません。

平成11年頃から生ごみの「小さな循環」を目指し、地域農家と市民が連携して堆肥化しているグループがいくつかあるものの、大きな広がりにはなっていません。

平成23年の麻生区区民会議で「生ごみ堆肥のあげます・もらいます」モデル事業を実施したところ、肥料取締法の制約があり自由な流通をさせられなかったことも課題のひとつでした。

これらのことから、Bグループでは「生ごみ堆肥を流通させ、地域内循環の実現を目指すこと」と、「冊子を全面改訂し、有効活用方法を検討すること」を活動テーマとしました。



■ グループでの取り組みと手法

①生ごみ堆肥の流通

まず、生ごみ堆肥を流通させるためには生ごみ堆肥の用途となる「出口」を確保することが課題と考えましたので、堆肥を使ってもらえる「農」とつながることを目指し、川崎市農業振興センターとの情報交換を打診しました。しかし、打診が具体的でないという理由で農業振興センターとの情報交換は実現には至りませんでした。

そこで、「家庭系生ごみのリサイクル推進協議会（仮称）」を設立し、生ごみ堆肥の流通を多様な団体で協議することを考えました。JAや農家や関係団体からも参加の承諾を得られましたが、「市民会議という立場上、分科会内で検討すべき」ということになり、協議会を開催することはできませんでした。

これらのことを踏まえ、分科会で協議を進めた後、平成25年3月22日に、「家庭系生ごみ堆肥利用の検討会」を開催しました。検討会はBグループメンバーと生ごみリサイクルリーダー等と事務局の9名での審議となりました。検討の結果、「農業振興センターから実情を聴きたい」となり、質問書をまとめ、訪問することになりました。

平成25年6月6日、農業振興センターを訪問し、生ごみ堆肥の流通等についての意見を伺ったところ、「川崎市と明治大学の生ごみリサイクル連携事業は川崎市がやっているのだから支援する姿勢ですが農業振興センターとして生ごみ堆肥を推奨する段階ではなく、肥料取締法は遵守しなければならない」という指摘を受けました。その一方で、「市民農園開設農家等へ、生ごみ堆肥についての情報提供の仲介協力はする」と回答を得ることができました。

それを踏まえ、市民農園の農地所有者と利用者等に生ごみリサイクル情報提供の手紙やアンケートを準備しましたが、それらを全て発行するまでには至りませんでした。しかし農家開設型市民農園の1つから協力の申し出があり、12月20日に「生ごみの堆肥化説明会」を開きました。

川崎市農業振興センター農業振興課 担当者様 2013.4.10

家庭系生ごみ堆肥の流通・利用にかかわるご相談のお願い

川崎市第3期ごみ減量推進市民会議
座長・藤原俊六郎
Bグループリーダー・天野悦子

川崎市第3期ごみ減量推進市民会議Bグループでは「家庭系生ごみ堆肥利用の検討会」を立ち上げ、生ごみの堆肥化に取り組んでいる各家庭での状況や、その生ごみ堆肥を使って花壇や畑をやっているグループなどの現状を調査してきました。生ごみ堆肥の有効性は川崎市と明治大学との連携事業なども始まり徐々に浸透していくと思いますので、まずは生ごみ堆肥の流通について検討したいと考え、肥料取締法についても読み合わせしました。

以下の目的のためには、どのような方法が考えられ、どうすれば実現可能なのか、アドバイスいただきたい、市民会議委員でこちらにお伺いしたいと思っています。お忙しい中恐縮ですが、4月中旬の候補日を2、3ご指示いただけましたら日程調整致しますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

目的：各家庭で作られた生ごみ堆肥のうち使いきれない分を有効活用して、資源循環、地域内循環を実現する。（それにより生ごみを堆肥化する家庭が増える）

質問1「使いたい」という農家や施設やグループに対し、堆肥提供者個人個人が受入先に直接持ち込むのは可能ですか？（1：1）の関係

質問2 イベントなどで堆肥回収を行い、「使いたい」という登録団体に受け渡すのは？

質問3 堆肥提供者個人が決められた場所（ex：区役所や生活環境事業所など公共施設敷地内の仮設堆肥場など）に持ち込み、集まったものを登録団体に取りに来るのは可能ですか？ また 個人個人が必要な時に取りに来るのも可能ですか？ 尚 行旅が花壇や畑などに配るのは可能ですか？

質問4 提供者からの回収も受入先への配布も全て行政（生活環境事業所など）が行うのは可能ですか？ この場合は扱うものが廃棄物ではなく堆肥なので、管轄が環境局減量推進課ではなく農業振興センターなのでしょうか？ そうした場合もこの方法は可能ですか？

質問5 「明治大学と川崎市との生ごみリサイクルに係る連携事業に関する覚書」が2月12日に締結され、新しくダンボール箱法についての取り組みが進められていますが、このような動きに農家はどうか考えられますか？

以上よりしくお願い致します。

農家開設型市民農園開設者各位 平成25年10月吉日

生ごみ堆肥の普及について

川崎市ごみ減量推進市民会議
第3期座長・藤原俊六郎
(明治大学農学部特任教授)
生ごみリサイクル部会長・天野悦子

私たちは市から委嘱を受け、第3期川崎市ごみ減量推進市民会議委員として、市民一人ひとりがごみ減量に取り組むための仕組みづくりについて検討を行っています。私たちの所属する部会では、廃却する生ごみを減らす方法として、生ごみを堆肥にして花や野菜の栽培に使うことを広めたいと活動しています。

生ごみ堆肥については課題もありましたが、製法や使用方法を一定にすることで既に実用化されており、明治大学黒川農場で実証栽培も行っています。

また、第3期市民会議では、『チャレンジ生ごみダイエット』という、市民向けのごみ減量や生ごみでの堆肥作りについての冊子をこの度改訂いたしました。川崎市の取り組みをはじめ、堆肥化などについてわかりやすく紹介されていますので、お読みいただけたら幸いです。

さらに、川崎市は家庭から排出される生ごみのリサイクルを推進するため、農地所有者と協働して生ごみリサイクルに関する取組を行っている市民団体への活動支援等を推進しています。具体的には、農地に生ごみ堆肥を活用して野菜の栽培等を行っている市民の団体に、年10万円を限度に助成するというものです。これらの活動等について、興味をお持ちでしたら、事務局である川崎市環境局減量推進課まで御連絡いただければと思います。御希望でしたら直接お問い合わせをさせていただきます。

連絡先：川崎市環境局生活環境部減量推進課 高橋
電話：(044) 200-2579 FAX：(044) 200-3923
メール：30genryo@city.kawasaki.jp

現在、川崎市と明治大学農学部が協力して、同大学黒川農場にて家庭の生ごみ堆肥による野菜の実証栽培が行われています。11/9（土）に開催される黒川農場収穫祭において、午後3時から生ごみ堆肥の取組内容に関する発表を兼ねた基調講演が行われます。
関心がある方はぜひお越しください。

川崎市ごみ減量推進市民会議 主催

生ごみで堆肥を作ませんか？
説明会にいらしてください

日時：2013年 12月20日（金）
11:00～12:00

場所：ここ 立川ファミリー農園

持ち物もありません。川崎市の制度・生ごみ堆肥の作り方の情報満載『チャレンジ生ごみダイエット』

●生ごみリサイクル活動成果展示の明治大学黒川農場との連携事業についてなど 随時にお答えします！
●生ごみ堆肥のつくり方・手配情報も！

お問い合わせ：川崎市環境局生活環境部減量推進課 高橋
TEL：044-200-2579



実際に農作物を作っている農園利用者 8 名の参加でしたので、熱心に色々な質問などが出て、今後の展開につながる期待の持てる説明会となりました。

②冊子の改訂

冊子の改訂にあたっては、創刊に関わった方々の思いを大事にし、かつ実際に冊子を使っている方々の意見を反映しながら改訂するために、川崎市生ごみリサイクルリーダーミーティングで意見を伺ったり、平成 25 年 2 月 14 日、3 月 4 日、22 日に公開編集会議を開催したり、B グループメンバーや市職員以外にも、第 1 期市民会議委員やグリーンコンシューマーグループ等、沢山の方の意見を反映しながら編集を行いました。

また、生ごみリサイクルにあまり関心のなさそうな一般市民の意見を伺うことも心掛けました。メンバーに日本フランチャイズチェーン協会の委員がいたので、所属元のスリーエフにご協力をいただき、冊子の改訂案へのアンケート調査を実施したり、身近な友人や区役所職員等にも聞き取り調査をしてより関心を持ってもらえるような編集をめざしました。

もう 1 点特筆すべきは、堆肥を使う側の農家などにも納得してもらえるような専門的な観点も加えたということです。メンバーに明治大学農学部特任教授の藤原俊六郎委員がいたので、生ごみ堆肥の特徴や使い方など執筆していただきました。

メンバーだけでなく、様々な方々から頂いた意見を大切に反映し、20 回近い校正を重ね、平成 25 年 8 月に改訂版「チャレンジ生ごみダイエット」を発行することができました。



■ 結果

①生ごみ堆肥の流通

第 3 期市民会議の任期中に、「家庭系生ごみ堆肥利用の検討会」の開催や、農業振興センターへの訪問ヒアリングを行いました。具体的な流通方法につなげることはできませんでした。できることは何か検討を重ねた結果、市民、活動団体、農家・JA、企業、有識者、川崎市環境局減量推進課・経済労働局農業振興センター等が参加した「家庭系生ごみリサイクル推進協議会（仮称）」の必要性を感じましたので、設立を目指していきたいと考えています。

②冊子の改訂

完成した冊子「チャレンジ生ごみダイエット」は、3,000 部を印刷し、現在市内各所で配布を進めています。区役所ロビー相談会や生ごみリサイクル講座やイベント出展、区役所カウンターなどで「私にもください」「わかりやすい」「助かります」と、喜んでいただいています。

また、改訂版冊子の印象について再度スリーエフにご協力いただきアンケート調査を行ったところ、「読

<配布状況> 平成 25 年 12 月 20 日現在

配布先	部数
生活環境事業所 5 か所	1400
麻生区役所、多摩区役所市民館	150
温暖化防止活動推進センター等	100
生ごみリサイクルリーダー、講習会等	600
区役所ロビー相談会、イベント等	200
その他（他市、委員など関係者）	50
残数	500

んでいて楽しかった、やってみたい」「図解されていてわかりやすかった。納得感があった」「キャラクターがかわいかった」「完成前原稿と比較して断然良くなった」「生ごみリサイクルに積極的で驚いた。マンションなどの集合住宅でもできるのですね」など、好意的な回答を得られました。その一方で、「生ごみダイエットのタイトルと中身の関連性がわからない」「生ごみダイエットと聞いて、ごみを減量するというイメージにつながらなかった」「『まだ食べられるのに捨てていませんか』の項を充実させレシピなどがあるとよい」などの改善意見も頂くことができました。

(3)Cグループ:リサイクルエコショップの充実

■ 課題設定の背景

Cグループでは、当初は「ごみの有料化」や「レジ袋の削減」という切り口からの活動を検討しましたが、これらの取組は市民・事業者・行政が協力し進めていくことが不可欠という観点から、「三者の連携によるごみ減量の目指し方」を検討することにしました。その際、すでに川崎市内にある「リサイクルエコショップ制度」に着目し、検討することとしました。



リサイクルエコショップについて検討し始めたところ、すぐに2つの疑問がわいてきました。それは、「リサイクルエコショップのことを市民はどれだけ知っているだろうか」ということと、「リサイクルエコショップ制度は有意義だが、その効果をもっと高めることはできないだろうか」ということです。

そこで、Cグループとしては、「市民が効果を実感できる『リサイクルエコショップ制度』とは何か」を調べることを活動としました。

■ グループでの取り組みと手法

市民が効果を実感できる『リサイクルエコショップ制度』を考えるために、活動は主に3つ行うことにしました。1つ目は、リサイクルエコショップ制度について市民にアンケートをとること、2つ目は市民の意見を踏まえ、リサイクルエコショップにアンケートを行うこと、そして3つ目は市民・事業者・市の三者による懇談会を開催することです。

■ 結果

①リサイクルエコショップ制度についての市民アンケート

平成24年10月14日にアゼリアで開催された「川崎市消費生活展」に出展し、市民の意識調査を行いました。「Q1. リサイクルエコショップを知っていますか?」という質問に対し、回答のあった87名のうち、23名しか「知っている」と回答した人がおらず、制度が知られていないことがわかりました。「Q2. リサイクルエコショップはどんな取り組みをしていると思いま

すか？」に対しては「リサイクル品の販売」と思っている人が多いこともわかりました。

実態としてはあまり認知度が低いリサイクルエコショップ制度ですが、「Q3. 近くにリサイクルエコショップがあったら利用したいですか？」に対しては「利用してみたい」と考えている人が多いことも明らかとなりました。



②リサイクルエコショップ制度についての事業者アンケート

市民アンケートの結果を踏まえ、実際のリサイクルエコショップに対し、平成25年3月に「名称」と「制度の充実」についてのアンケートを行いました。398店舗に送付し、97店舗からの回答を得ることができました。

「リサイクルエコショップ制度の広報・PR」についての質問では、「市のホームページでリサイクルエコショップの一覧と地図を掲載すること」を63団体が期待しており、ニーズの高さが明らかとなりました。

「リサイクルエコショップの名称」についての質問では、「変更すべき」が35店舗であったのに対し、「変更すべきでない」が18店舗と、変更に対するニーズがあることがわかりました。なお、具体的に変更する場合、新名称は「エコショップ」がよいという意見が多数を占めました。

「リサイクルエコショップ制度の充実」についての質問では、63%の店舗が「制度の見直しが必要」と回答しており、制度見直しの必要性が明らかになりました。制度見直しのポイントとしては「店だけでなく商店街やNPO等の加入を促すこと」を多くの団体が提案していました。

③リサイクルエコショップ制度についての三者懇談会

市民アンケート、事業者アンケートの結果を踏まえ、市民・事業者・市の三者による「リサイクルエコショップ三者懇談会」を平成25年7月1日に開催しました。市民会議メンバー4名、リサイクルエコショップ団体3名、市の担当部局から2名の出席があり、意見交換を行いました。意見交換ではPR不足や名称の見直し、制度についての話し合い、「リサイクルエコショップ」を、現状にあわせ、「リサイクルショップ」と「エコショップ」に分化することが提案されました。



4. 市民会議活動報告会・意見交換会

約2年間の市民会議の活動を、広く市民に報告するために、一般市民の参加者を募集した上で、「第3期 川崎市ごみ減量推進市民会議 活動報告会・意見交換会」を開催しました。

■ 概要

日時	平成25年10月30日（水）13時30分～16時
会場	川崎市産業振興会館第3研修室
参加者	市民会議委員、一般市民（8名）、事務局（市）
プログラム	1. 開会挨拶（川崎市環境局廃棄物政策担当部長） 2. 活動報告会 3. 意見交換会 4. 活動報告・意見交換に関するコメント（川崎市環境局廃棄物政策担当部長） 5. 閉会挨拶（座長）
内容	<活動報告会> 3つのグループがそれぞれの活動について活動報告を行い、報告後は参加者との質疑応答を行いました <意見交換会> 各グループの活動報告が終わった後、それぞれのグループで次のテーマで意見交換会を行いました。 Aグループ 未来の3Rに向けて、わたしたちができること Bグループ わたしたちが望む生ごみリサイクル Cグループ 未来のエコなお店って？ 意見交換の最後に、各グループからそれぞれの意見交換会の報告がありました。



■ 総括

Aグループ＜未来の3Rに向けて、わたしたちができること＞

Aグループでは廃棄物の3Rと漠然としたテーマになりましたが、特にその普及活動を進めるためのチラシを作成しました。経験豊富な廃棄物減量指導員の方たちの気持ちが詰まっていますので、まとめるために時間がかかりました。

報告会後の意見交換会では、「3Rの優先順位を掲載してほしい」という具体的な意見がありましたので、反映することとしました。その他にも、今回のチラシには反映しきれませんが、容器包装を行政収集ではなく店舗回収に持ち込むことの周知についてや、広報の対象など、多岐にわたる多様なご意見を頂きました。

今後は、市内の皆様のご協力を頂きながら、3Rの普及啓発に取り組んでいきたいと考えています。

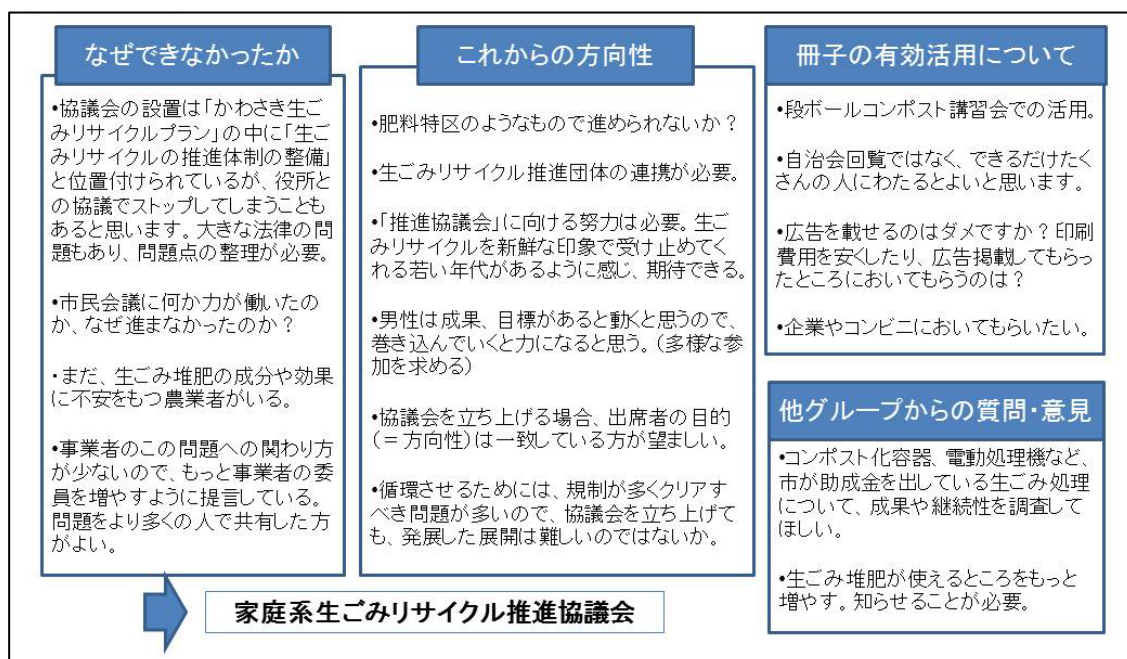


Bグループ＜わたしたちが望む生ごみリサイクル＞

活動報告後の質問で「堆肥化だけでなくガス化は？」と聞かれましたが「家庭からの生ごみは小さな循環という地域での解決方法を検討しました。」と答えました。

意見交換会には長年生ごみリサイクルを実践している参加者4名が加わり、10名での活発な討議となりました。生ごみ堆肥の流通について、農業振興センターとの関わりや協議会設立などが当初の予定程には進まなかった件を、市民には見えない様々な問題もあろう

とした上で「根気強くたゆまず解決していくべき」と確認しあいました。＜意見を抜粋掲載＞



また参加者アンケートでは「協議会、もしくはそれに準ずる会の立ち上げなど今後に向けて意見の一致ができた。」「参加して良かった。実践している者としてこんな機会があるのがよい。」「チャレンジ・生ごみダイエットの改訂など具体的な成果がでている。方向付けがはっきりしていて、今後の進展が期待できる。」等の意見をいただきました。

Cグループ＜未来のエコなお店って？＞

Cグループでは、現在のリサイクルエコショップ制度の充実に関して市民を交えて議論を行いました。その結果、リサイクルエコショップ制度充実の視点として、①わかりやすい名称への変更、②時代にあった効果の実感できる認定基準への見直し、③市民、事業者を巻き込んだ制度改定のあり方、が重要であることが示されました。

そのうち名称の変更に関しては、「リサイクルショップ」と「エコショップ」制度を分けるべきだということで意見が一致しました。

「エコショップ」の認定基準については、ごみ減量とエネルギーの大きく2つの軸から構成され、ごみ減量の部に関しては、現行の基準を見直し、より実感として「進んだエコ」が感じられる、より基準を引き上げたもの（たとえばエコマーク商品を扱っている→エコマーク商品が半分以上など）とすることが提案されました。

さらに、こうした認定基準を市民にとっても事業者にとっても、その効果や制度の意味が実感できるようにするために、認定基準を決める過程に多くの市民、事業者を巻き込むことが大事であるということが確認されました。その手段として、エコ商店街をモデル地区として指定し、認定基準の実証実験を行ってみるといったことが提案されました。



＜市からのコメント＞

各グループからの活動報告や意見交換会について、環境局廃棄物政策担当木村部長からコメントがありました。

各グループの活動等について、Aグループの普及広報チラシは字が大きくしてあり、読みやすい、Bグループの生ごみ堆肥のリサイクルは、関係法令といかにつきあっていくかを考えていく必要がある、Cグループのリサイクルエコショップは、時代の推移や他市の取組みも踏まえながら充実を考えていく必要がある、といった話や、平成27年度の3処理センター体制に向けて、様々な課題があるため、引続き皆さまから御協力をいただきながらごみの減量を進めていきたい、といった話がありました。



5. まとめ

(1) 今後の取組に向けて（課題・提案）

各グループから、今後に向けて、それぞれの活動を踏まえた次のような提案がありました。

Aグループ：廃棄物の3Rと普及啓発

ちらしは作成できましたが、それが様々な市民の皆様に届かなければ意味がありません。そこで、これからの活動は、いかに広く普及させていくかが課題となります。Aグループとしては、以下の方法で市民の皆さまにちらしを紹介していきたいと考えています。

1. 生活環境事業所等、市内の環境関連施設・団体へのちらしの配布
2. 11月に開催されるごみ減量指導員の役員会での紹介
3. 生活環境事業所の「ふれあい出張講座」での配布
4. 市のホームページへの掲載

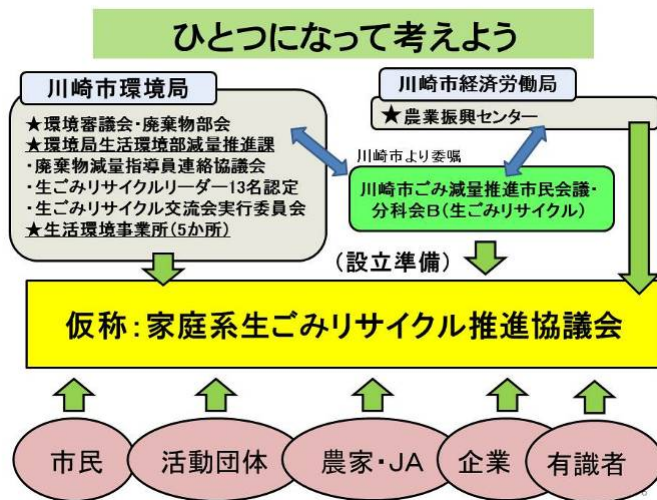
しかし、ただちらしを市内で配布するだけでは、十分ではありません。ごみ減量や3Rを普及させるの体制や雰囲気づくりを、市民の皆さまのご協力を得ながら広めていくことが、本当に必要なことだと考えています。

Bグループ：生ごみリサイクル

①生ごみ堆肥の流通

平成18年に策定された「かわさき生ごみリサイクルプラン」にも「生ごみリサイクル推進体制の整備」が掲げられており、関係者が個々に取り組むのではなく連携していくことの重要性を謳っています。目的に向け協力して実践していく場として「家庭系生ごみリサイクル推進協議会（仮称）」の設立を提案します。

報告会では「肥料特区になって推進したら」というアイデアも出されました。こういうことについても上記協議会の場で審議し、先進取り組みへチャレンジしてほしいと思います。



②冊子の改訂

冊子の活用方法としては、より多くの市民の目に留まり手にしてもらうことを期待します。例えば、小中学校の環境学習で児童に配布し家庭に持ち帰って話題にしてもらったり、美容室や商店やコンビニエンスストアなど市民の生活に近い場所に置くことも大切です。環境事業所の行うふれあい講座や説明会などで使ったり、生ごみリサイクル講座などの副読本として配布活用するのも有効でしょう。

冊子に宣伝を載せて広告料を印刷費用に廻すことで、かなりの増刷も出来るのではないのでしょうか。3000部では発行の8月から5か月経ち残りわずかです。これからは増刷時修正を加え

ながら冊子の有効活用方法を考えていくことが肝要になると考えています。

これまでの範囲にとどまらず、広く配布することを提案します。

Cグループ：リサイクルエコショップの充実

Cグループでは、市民アンケートや事業者アンケート、三者懇談会、意見交換会等の活動を通して、リサイクルエコショップ制度について以下の課題があるということを明らかにしました。

① 「リサイクルエコショップ」という名称が制度発足時とは印象が異なり、市民にとって現在ではわかりにくいもの、誤解を与えるものとなっている。

② 名称と同様、認定基準も時代の変化のなかで見直す必要が生じている。

さらに、活動の結果、上記課題を解決方法として、以下の点を提案としてまとめました。

① 「リサイクルエコショップ」を「リサイクルショップ」と「エコショップ」に分化させた方がわかりやすい。

② 「エコショップ」の認定基準を市民、事業者にとって効果や制度の意義が実感できるように改訂するために、実証実験等を含め、市民、事業者を巻き込んだオープンな議論をおこす。このことによって、制度の充実をはかるとともに、制度を市民に広く知ってもらうことが可能となる。

リサイクルエコショップ制度は、発足からすでに 20 年経過し、その間、リサイクルやエコに関する人々の意識は大きく変わっています。今回の活動結果からみても、早期の見直しの必要性は明らかです。川崎市に対しては、上記の活動の成果を踏まえた、リサイクルエコショップ充実のための制度見直しを強く希望するとともに、市民として認定基準改定に向けた議論を活性化するための活動を継続していきたいと思います。

(2) 第4期市民会議に向けて

最後に、第3期の市民会議を通じて課題と感じたことのうち、次期市民会議の際に参考にしてほしいことをまとめました。第4期の会議で活かされることを期待します。

- ・テーマ設定に時間を要した。具体的なテーマをあらかじめ決めた上で募集を行ったほうが、円滑な運営が期待できるし、委員が会議への参加当初に議論できるものと期待した内容との乖離を防ぐことができる。
- ・町会や学生等、多様な主体が参加できるとよりよい議論ができるのではないかと期待した内容との乖離を防ぐことができる。
- ・各委員は、個人の意見や出身団体等の意見に固執せず、様々な意見に耳を傾けながら議論を行ってほしい。
- ・分科会の活動だけでなく、会議全体で取り組める内容もあるとよい。
- ・活動報告会に参加した一般市民が8名だったのは残念。広報の仕方等に工夫がほしい。
- ・市民会議を傍聴する方がいなかった。従って活動報告会の一般参加者も非常に少なかった。広く市民に公開・広報していき、会議の質を高める工夫の必要を感じる。